

【目的】婦人科悪性腫瘍に対する骨盤内臓全摘術の意義を検討する。

【対象】子宮体癌1例, 子宮頸癌2例, 卵巣癌2例, 中皮腫1例. 中皮腫の1例を除く5例は, 骨盤内臓全摘術を施行する以前に化学療法あるいは放射線化学療法が施行されていた. 肉眼的R0手術が5例, R1手術が1例であった。

【結果】4症例で創・骨盤腔感染を来したが保存的に治療可能であり, 再手術例や術死例は認めなかった. 術後約2年無再発で生存している症例も認めた。

【結語】術後経過観察期間が短く予後についての検討は十分に出来ないが, 究極の debulking surgery としての意義は大きいと考えられた。

## 6 当院における FOLFOX, FOLFIRI 療法の現状

下田 傑・西村 淳・新国 恵也  
河内 保之・牧野 成人・寺島 哲郎  
北見 智恵・横澤 将宏・広瀬 由和  
厚生連長岡中央総合病院消化器病  
センター外科

今回私達は当院における FOLFOX, FOLFIRI 療法の現状, 成績などについて検討した. 対象は2006年10月～2008年11月までに治療をした60例. 2008年の新規導入者数は30名. 原則として進行・再発癌に対して FOLFOX, FOLFIRI 療法は行われているが, 2例だけ術後補助化学療法として行われていた. 進行・再発切除例は11例で, 10例は現在まで再発を認めていない. 進行・再発非切除例ではレジメン別, 投与量別などの奏効率について検討した。

稀な副作用として間質性肺炎を2例認め, うち1例は救命できなかった. 今後も長期にわたる FOLFOX, FOLFIRI 療法症例の蓄積が必要であると考えられた。

## 7 胆管癌を合併した3歳男児の先天性胆道拡張症の1例

七種 伸行・内藤 真一・新田 幸壽  
飯沼 泰史\*・橋立 英樹\*\*  
新潟市民病院小児外科  
同 救命救急センター\*  
同 病理部\*\*

我々は胆管癌を合併した3歳男児の先天性胆道拡張症の1例を経験したので, 若干の文献的考察を加えて報告する。

症例は3歳, 男児. 激しい上腹部痛・嘔吐で発症した. 腹部超音波検査および腹部CTで嚢腫状に拡張した総胆管を指摘されたが, 胆道壁の不整や隆起性病変など悪性腫瘍の合併を疑う所見は認めなかった。

先天性胆道拡張症と診断し, 胆嚢及び肝外胆管の切除と肝管空腸吻合を行った. 切除標本の肉眼所見では粘膜面の異常所見は認められなかったが, 病理所見では胆嚢管に浸潤し広範囲な上皮内進展を伴う高分化腺癌を認めた。

先天性胆道拡張症の初回手術時に胆管癌合併を認めた症例は小児でも少数ながら報告されているが, 本症例は世界最年少と思われた。

## 8 Fibrous sheath を用いた中心静脈カテーテル入れ替えの工夫～長期血管温存のために～

平山 裕・窪田 正幸・奥山 直樹  
塚田 真実  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
小児外科学分野

短腸症候群や難治性イレウスの患児において, 血管ルートの長期温存が課題となる. 我々は中心静脈カテーテル(以下CV)入れ替えの工夫として, 症例により皮下トンネルの線維性鞘(fibrous sheath)を再利用する方法を行っている. H20年6月からの約5ヶ月間に2例, 計3回(平均7歳7ヶ月)の交換を行い, いずれも合併症なくスムーズに施行し得た. 手順はまず, CV皮膚刺入部から剥離を進めカフを剥離後, CVを包む線維性鞘を同定する. 次いで感染所見が無いことを確認

しCVを抜去した後、新しいCVをゆっくりとsheath内へ挿入する。その際、カテーテルのみでも挿入可能であるが、我々はステントとしてガイドワイヤーをカテ内に通した上で挿入している。施行した3回の平均手術時間は71.6分であったが、カフやポート周囲の剥離時間を除いたカテ自身の入れ替え時間は正味10分程度であった。線維性鞘を用いたCV入れ替え法は長期血管温存に有用な手段と考えられた。

### 9 臍帯ヘルニアに対するリングリトラクターによるサイロ形成術の経験

大滝 雅博・山下 淳\*・小島伸一郎\*\*  
 中野 雅人\*\*・二瓶 幸栄\*\*  
 鈴木 聡\*\*・三科 武\*\*  
 仲谷 健吾\*\*\*

鶴岡市立荘内病院小児外科  
 同 臨床研修医\*  
 同 外科\*\*  
 新潟大学臨床研修医\*\*\*

臍帯ヘルニアに対し、リングリトラクターを使用したサイロ形成術および腹壁閉鎖術を施行した1例を経験したので報告する。

症例は0生日、男児。胎児エコーで臍帯ヘルニアを疑われ、34週6日週当院産科紹介受診。胎児MRIで肝臓が主な脱出臓器である臍帯ヘルニアの確定診断から36週1日帝王切開で出生。出生時体重2028g アプガスコア7/9点で他に合併奇形を認めず。0生日にリングリトラクターを用いてサイロ形成術施行、5日に腹壁閉鎖術を施行した。経過良好で37生日退院。

【まとめ】リングリトラクターを用いた臍帯ヘルニアに対するサイロ形成術は、メッシュを使用する従来法よりも作成・縫縮が簡便であり、有用であった。

### 10 後腹膜腫瘍の1例

近藤 公男・大澤 義弘・飯田 道夫\*  
 太田西ノ内病院小児外科  
 同 外科\*

症例は1才6ヶ月の女児。6ヶ月頃から腹部膨満あり。平成20年3月近医に腹部膨満を指摘され当科受診。全身状態良好、上腹部中心に著明な腹満を認め、可動性に乏しい弾性硬の腫瘤を触知した。CTで最大径15cmの多嚢胞性腫瘍を認め、一部に石灰化像を認めた。腫瘍マーカーの上昇はなかった。以上より奇形腫を最も疑い、手術を施行した。腫瘍は後腹膜原発の多嚢胞性腫瘍で、肝下面から腎周囲まで広汎に認めた。腫瘍の原発部とおもわれる部が大動脈全面から臍に強固に癒着しており全摘は困難と判断し、部分切除にとどめた。術後経過は良好であった。病理組織診断は成熟奇形腫であった。術後CTで残存腫瘍を認めたが、術後3ヶ月時には腫瘍は著明に縮小していた。後腹膜奇形腫の診断、治療方針等につき若干の文献的考察を加え報告する。

### 11 巨大卵巣奇形腫(12歳女児; 5.61kg)の手術例

内山 昌則・村田 大樹・大野 正文\*  
 県立中央病院小児外科  
 同 産婦人科\*

12歳女児の巨大腹部腫瘍を手術治療した。小学校6年生で7ヶ月前より腹部膨満に気づいていた。次第に増大し母親も気づいたが本人が医療機関受診をいやがり放置していた。この間、腹痛はなく、食事や便通も普通で学校生活を普通にこなしていた。初潮は1年半前で以後定期的に月経は来ていた。小学校卒業にあたり心配となり近小児科を受診し、CTで巨大腫瘍を指摘され当小児外科を紹介された。

来院時腹部膨満は著明で、画像所見で石灰化はなく頭側が囊腫状、尾側は実質状で長径は30cm以上の巨大腫瘍であった。腫瘍マーカーはSCC(扁平上皮癌関連抗原)が軽度上昇していた。右卵巣未熟奇形腫などを考え開腹手術を行なった。